

ディベートをやってみて どう?

子どもたちの声

ディベート授業の感想文の抜粋です。小中学生ともに、大人顔負けのコメント。これも寝屋川教育の成果かな？



市立石津小学校
6年生

自ら取り組もうとする気持ち

この6年間で最も私を成長させたのはディベートでした。これからの人生で困難があるかもしれないけれど、このディベートで身に付けた「自分から取り組もうとする気持ち」を思いだして、みんなの役に立てるよう頑張っていきたいです。

論理性を意識する

事前に情報収集することで、全体像や仕組みを理解することができ、お題に対する自分のチームの弱点も把握することができました。具体的な数字を示すことで、脳内でメリットやデメリットが図式化され、説得力が増すので押さえておきたい点だと思いました。ディベートを行うことで、何事に対しても論理性を意識するようになりました。



市立第十中学校
3年生



市立第六中学校
1年生

説得力のある立論

情報源を確かめる過程で、正しい情報とそうでない情報を判断することで、説得力のある立論になりました。また、けんか・言い合いとは違い、根拠をしっかりと持って相手に伝わりやすいように考えることができました。

先生たちの声

一つの目標に向かって協働する姿

今後子どもたちが進学していく中で、一つの目標に向かって、チームのためにどんな人とも協働できることが大切だと思います。そういう姿を、ディベート学習を通して、子どもたちから見せてもらっています。



市立石津小学校
稲井先生

対話を通じて問題解決

ディベート学習に取り組むことで、相手の意見に傾聴できるようになり、立場の違う相手とも、ただ否定をし合うのではなく、根拠をもとに話し合い、解決に向かうことができるようになりました。



市立明和小学校
大井先生

日々成長を実感

ディベートで負けたときでも生徒たちは、悔しさを感じながらも反省し、お互いに支え合ったり助け合ったりしていました。そんな場面を何度も目の当たりにし、日々成長していることを実感しています。



市立第四中学校
兵頭先生

新しいものの見方

仲間と協働しながら繰り返しやっていくうちに、「この物事に対してはこういう見方があるんだな」など、ディベートを通して、新しいものの見方ができるようになる生徒が増えていけると感じます。



市立第八中学校
永井先生

「寝屋川教育」を紹介します

問 教育指導課 (☎813・0071)・総合教育研修センター (☎822・2126)



ディベートを通じて

子どもたちが

変わる

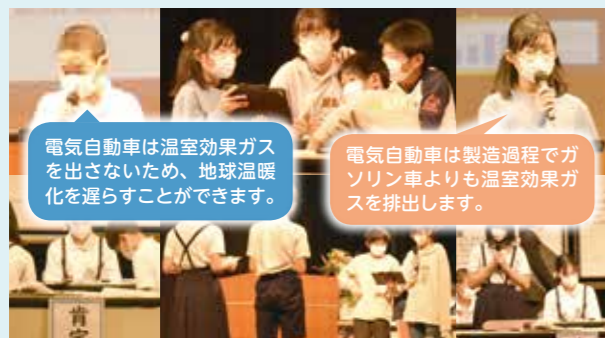
変化の激しい予測困難な社会。多くの情報の中から適切な情報を選択し、自分の頭で考えることが必要です。

今回の特集では、市独自のディベート教育などを通じて「考える力」を身に付け、どんな環境であってもたくましく生き抜く子を育む「寝屋川教育」の取り組みを紹介します。

「教育フォーラム 2022」を開催しました

市内の教員や保護者など約1,000人の参加者が見守る中、児童生徒によるディベートマッチが行われ、大舞台でも堂々と「言い認め合う」たくましい姿が見られました。

小学生の部



電気自動車は温室効果ガスを出さないため、地球温暖化を遅らすことができます。

電気自動車は製造過程でガソリン車よりも温室効果ガスを排出します。

テーマ

すべての自動車は電気自動車にするべきである。

◆本日の感想は？

大勢の前でのディベートは緊張しましたが、仲間とがんばれてよかったです。

◆実際にやってみてどうだった？

前もって準備してきたことにアレンジできたことがよかったです。

◆ディベート教育で身に付いた力は？

自分の意見を言うことが苦手でしたが、友達にもしっかりと自分の意見を言えるようになりました。

中学生の部

テーマ

飲料用のペットボトルは、すべてビンにするべきである。

◆本日の感想は？

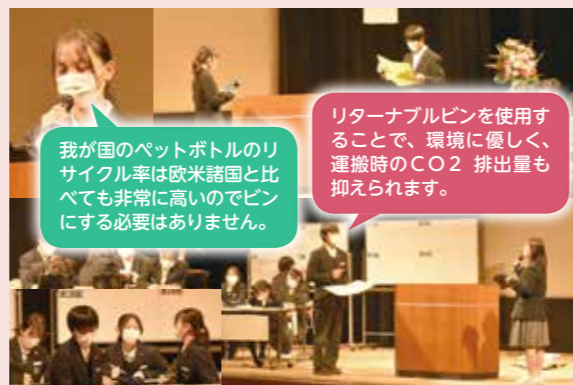
大きい舞台に立って、うまく喋（しゃべ）れないところもありましたが、すごく良い経験ができました。

◆本日の向け、工夫した点は？

言葉の言い換えです。断言するような言い方はかえって、相手に反論される恐れがあるため、なるべく避けるようにしました。

◆ディベート教育で身に付いた力は？

言語能力が向上したと思います。以前はよく「主語がない」と注意されましたが、論理的に話せるようになりました。



我が国のペットボトルのリサイクル率は欧米諸国と比べても非常に高いのでビンにする必要はありません。

リターナブルビンを使用することで、環境に優しく、運搬時のCO2排出量も抑えられます。

「言い認め合う」子どもたち

ディベートマッチを終えた子どもたちは、学校を越えてお互いを認め合っていました。学校は違ってディベートという共通の対話の手法を使うことで、子どもたちはお互いの「良さ」「頑張り」に気づくことができるのです。ディベートは、こうした他者理解をも生み出します。

アフターディベート



市立石津小学校
6年生の皆さん

相手はとても強く全然緊張していないと思いました。答えることが難しい質問が多く、質疑と反駁（はんぱく）の横のつながりがよいと思いました。



市立明和小学校
6年生の皆さん

立論で言ったことを反駁までつないでいたこと、質疑に答える時に「はい」か「いいえ」で統一させていたところがいいと思いました。



市立第四中学校
2年生の皆さん

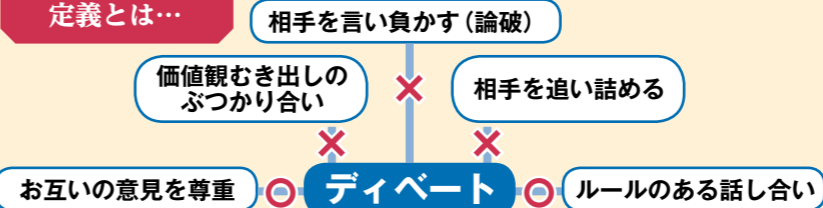
データを用いてこちらの反駁を崩すようなところがよかったです。日本だけでなく世界のデータを活用していたので、参考にしたいです。



市立第八中学校
2年生の皆さん

聴いている人に伝わりやすい話し方で話していたところがよかったです。相手の意見を聞いて、「そういう見方もできるんだな」と勉強になりました。

『ディベート』の定義とは…



- ・ルールのある、相手あつての議論・討論
- ・説得するのは、相手ではなく審判
- ・質問や反論は、意見を成長させてくれるもの

「ディベート」の活用



ルールある話し合い
ディベートは、「話す時間や役割が決まっている」「説得するのは相手ではなく審判」などルールの中で話し合うものです。ルールに則った相手からの質問や反論を受けることで、自分たちの意見が成長することを体験できます。

従来の指導からの変化
考える力の育成には、従来の「正解を子どもたちに一方的に教え込む」という指導方法を、「子どもたちを主体的な学び手として育てる」という指導方法に変える必要があります。

個人として、学級として成長
ディベートを行うことで、子どもたちの姿が変化していきます。相手の発言を傾聴し、自分の発言に責任を持つようになり、結果として個人が成長します。また、ディベートは1人ではなくチームで行うため、仲間と協力関係が深まり、よりよい学級づくりに繋がっていきます。

ディベートにより変化する子どもたちの姿

- ① 筋道を立てて考えることができる
- ② 相手を尊重して話し合うことができる
- ③ 必要な情報を集め活用することができる
- ④ その場の空気に流されない健全な個が育つ
- ⑤ ④のような個が集まる望ましい学級集団へ

「ディベート」の第一人者であり世界でも活躍中



Profile

大阪公立大学工学研究科機械工学分野 准教授、カリフォルニア大学バークレー校 客員研究員

2005年に東京大学英語ディベート部を設立、World University Debating Championshipなどで日本記録を樹立。その後、文部科学省調査研究事業や教育委員会と連携し、学校教育における即興型英語ディベートの推進活動を行っている。

市教育委員

なかがわちひろ 中川智皓先生

に聞きました！

学校教育や社会教育についての方針などを決定する教育委員。毎月1回の定例会を開いて子どもたちの教育について協議を行っています。その一人が中川先生です。中川先生はカリフォルニア大学の研究員のため、定例会にはリモートで参加。ディベートの第一人者として海外から市の教育に携わります。

「他者へ想いを馳せる力」が育まれる

ディベートとは、あるお題に対し、賛成チームと反対チームに分かれ、第三者を説得する議論の方法の一つです。教育現場で取り扱うディベートは、いわゆる論破が目的ではなく、様々な視点から物事を考え、よりよい方策とは何なのかを議論しながら考える訓練です。ディベートを通し、考える力が身に付くことはもちろん、考えを言語化すること、分かりやすく表現すること、チームメイトと協働してまとめあげることなど複数の力が磨かれます。最終的には、他者へ想いを馳せる力が育まれることが期待できます。

すべての市立小中学校での継続実施は画期的

寝屋川市では教育大綱にディベート教育などを通じた「考える力」の確立が掲げられています。すべての市立小中学校においてディベートの授業が割り当てられ、継続的に実施されていることは画期的です。ディベートの授業内容についても、各校の取り組みの情報交換も行われ、年々進化しています。寝屋川教育フォーラムでは、他校とのディベートを行うなど、成果発表の場も設けられています。寝屋川市のディベート教育で「考える力」をはじめ、子どもたちの「生き抜く力」がますます育まれますよう期待しています。

寝屋川教育の成果

これまで紹介してきた寝屋川教育の取り組み（ディベート教育・ねやがわスタンダードなど）が、問題の正答率や子どもたちの意識面において、着実に成果として表れています。

※各グラフについて、令和2年は新型コロナウイルス感染症感染防止のため未実施。

話す・聞く 領域の正答率が向上、対象学年がすべて全国値超え

小学校2年生から5年生、中学校1・2年生を対象に実施している学習到達度調査における、国語科の「話す・聞く」領域の正答率が向上傾向にあり、令和4年度は対象となる6学年すべてにおいて、全国値を超えました。

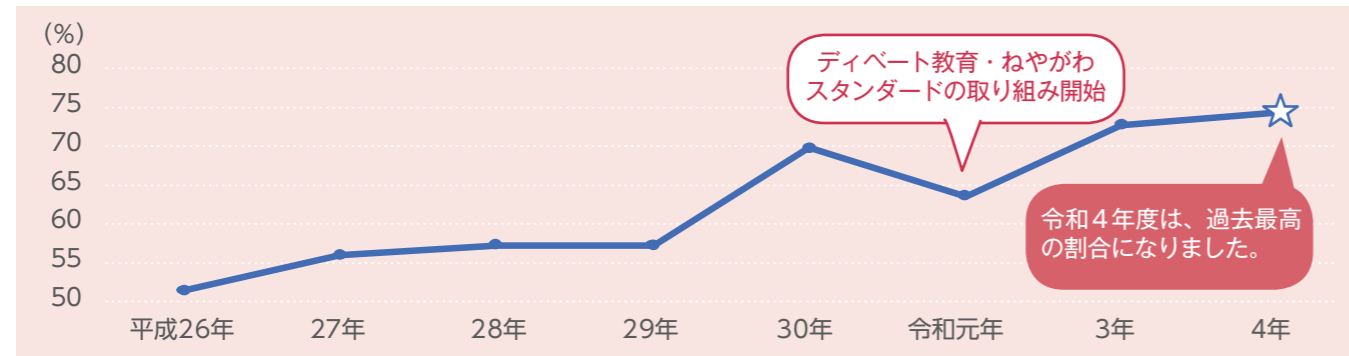
国語 「話すこと・聞くこと」領域の正答率が全国値を超えた学年の数



考えを深めたり、広げたりすることができる 割合が増加

全国学力・学習状況調査にあわせて行われる子どもたちへのアンケート中の項目、「考えを深めたり、広げたりすることができる」の数値が、この数年間で大幅に伸びています。

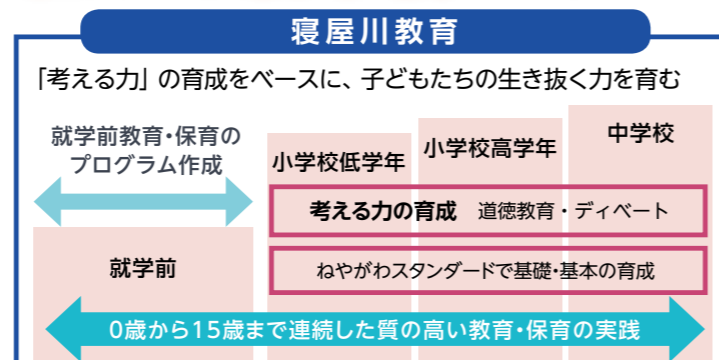
話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりできている、と答えた児童・生徒の割合



寝屋川教育の取り組みを就学前にも

「寝屋川教育」では、9年間の継続した「小中一貫教育」の取り組みに加え、就学前の時期を含めた0歳～15歳まで連続した教育を通じて、市の子どもたちを大切に育てていきます。

現在、就学前の時期に、多様な活動を楽しみながら「寝屋川教育」の基礎を培うことができるプログラムの作成を進めています。



生き抜く力の根っこを育む「寝屋川教育」

全体を支える根っこを育む
ディベート教育は、「寝屋川」から学べるという理念に基づき進めている「寝屋川教育」の一環です。子どもたちの成長を一本の木に例えた場合、まず育むべきは全体を支える根っここの部分であり、主にディベート教育や道徳教育を通じて身に付く「考える力」がこれにあたります。

「寝屋川教育」が目指すもの

環境変化でも倒れない
これらの取り組みを地道に積み重ねることで、学力・体力・非認知能力という葉が茂り、たとえ嵐のような激しい環境変化の中でも倒れることのない、考える力を身に付けた、たくましく生き抜く子を育むことを目指しています。

どの学校でも同じ教育
その根っこの上に注がれる水・肥料にあたるのが、「ねやがわスタンダード」です。学びの基礎・基本となる重要な部分について、どの学校でも同じ教育を受けられるよう学校を越えて、教員間で授業の進め方などの方向性が共有されています。

- ### ねやがわスタンダードの5つのテーマ
- ① 日々の指導
 - ② 探究型の授業づくり
 - ③ 家庭学習
 - ④ 学び続ける教師
 - ⑤ 同僚性

「ねやがわスタンダード」とは、今まで本市が培ってきた教育と秋田教育を研究する中で作り上げた指導法であり、子どもたちを指導するときに大切にしたい視点や方向性、各種理論など、本場に必要な事項をまとめたものです。各学校で、この「ねやがわスタンダード」をベースに、子どもたちの実態を踏まえて教育・指導を行い、基礎から発展へとつながる学力、様々な理論に基づき鍛えられる体力などを確実に身に付けられるように取り組んでいます。

ねやがわスタンダードとは

なぜ秋田？

全国学力・学習状況調査で常に上位の成績を収めている秋田県の取り組みを調査・検証し、それらを参考に市独自の学習法を確立し、本市の学力向上に努めてきました。

秋田教育の特徴である「探究型授業」などを重点的に実践している学校に対して教員を派遣し、その価値観や方向性を共有することで、更なる推進を図ります。

秋田市現地研修

秋田市現地研修には、市立小中学校の管理職及び教員、教育委員会事務局が参加しました。実際に現場を見て、秋田の先生たちと交流することで、秋田教育を肌で感じることができました。

● 研修に参加した教員たちの感想 ●

- 学習の目標を「自己決定」させ、そのことについて授業内で「考え続け」、最後に「振り返り」で学びを確認するプロセスが確立されていました。
- 複数の教員がチームを組んで「授業づくり」に関わることで、経験年数の少ない教員に対して、ベテラン教員の持っている授業の技術やノウハウといった教育的資産の継承がなされていました。

